

浦 歌無子

口語詩句賞と同じく、月間の佳作に選ばれた作品のなかから自選十篇を一組とした応募ということで、一篇一篇の完成度にばらつきのあるものもありましたが、これからの可能性ということで言えば、どの応募者にもそれを感じることはできました。これからも書き続けてゆこうという意志を持つ方々のなかから候補者を選出するのは、ずいぶんと困難を伴う時間でしたが、バラエティに富んだみずみずしいポエジーに触れることができました。今回惜しくも選ばれなかった方もぜひ書き続けてもらいたいです。書きたい気持ちがある以上、詩と向き合う時間は生を生かすことにつながるのではないのでしょうか。私自身も同じ書き手として、詩になにができるのか考えながら、ともに前へと進んでゆきたいと思います。

以下、特に印象に残った作品や作風に関して記します。
長谷川柊香さん（宮城県）の作品は、

六月に鏡とじゃんけんして負ける
遠雷／妹が眉毛を剃りはじめる
酔った父は月まで水を買いに行く

など、イメージの呼応によって詩的空間が豊かに広がっています。また、

ビル街の心臓めいている桜
流れ星夜空の傷はすぐ閉じる

など、鮮やかな着想が世界の見方を新しくしてくれます。

藤ほたるさん（神奈川県）は、
本屋さんみんな毛糸のゆびさきで／頁をめくり文字をまもった

という作品のとおり、言葉を守るようにやわらかく響かせます。それは、

にせんにじゅういちねんを水飛沫／あげて渡ってくももいろのくじら

など、ひらがなの遣い方にも表れています。また、
どらごんの形にイヤホン絡まって／取り返しをつかない
事をしてきた

電車で本を広げるとびびびって／差しこむひかり／戦争をしない

改札を出たらひらたい海ひとつ／抱き寄せるから死んで
いいから

長生きは望まないからタンポポの／綿毛みたいな性器く
ださい

など、やわらかさのなかに息づく生の痛みに揺さぶられ
ます。

立花ばとんさん（東京都）の作品は

半透明なものはみな宝石だと／いう／ 君の／のむ／

麦茶

僕は／ 殴る／啄木は／ 改行する

夜、洗濯機が／新しい海に／ なるうとして／音を立てる
など、表記の仕方にも意識的で、世界を自分の言葉で書
き換えていこうという意志が伺えます。

折田日々希さん（神奈川県）。

ケトルには／しずかなお湯が沈んでる／あの世の朝を汲
んだみたい

コーヒーの／ぬるさ感じるてのひらに／思い出す昼の／
深海のねむさ

父親が／高野豆腐を／日没のように食べてて／雨に似る箸
どんぐりを踏んでしまった／いきおいで／そのまま星も
踏んでしまった

など、なにげない日常の時間が、広い空間や長い時間と
つながっていて、詩に深さをもたらしています。また、
観覧車から街を眺める心地する／姉のつむじをひさびさ
にみて

君がふと窓をひらいて／手をのばしたくなる雨の／予感
になりたい

など、安堵のなかのさみしさ、さみしさのなかの喜びな
ど繊細な心のありようが伺える作品にも惹かれます。

松下誠一さん（東京都）の作品は

青空の罅線として電線を、／僕らが利き手で掴む焦燥
セブンティーンアイスの／グレープシャーベット／自死
からいちばん遠いところに

など、身近な具体物を手がかりに、どうやってこの世を
乗り切るべきか模索しているように、また、

空爆の爆発音を聞くだれも入って／こない自分の部屋で

ファスナーを最大限に引きあげて／なにもできないんだ
ぼくたちは

と、何かを断念しているような作品は、個人を越え、今
ここを生きている人々の心性をとらえようとしているよ
うに響いてきました。

白野さん（新潟県）の作品には
紫陽花をいっしょに見れば中学の／校歌みたいに透き通
る恋

潮風にかこまれながら夜はただ／ひかりの無さ あなた
はあなた

不織布をまっかな口紅でぬらして／話しつづけた星のこ
と 夜明け

と、経験のみずみずしさが繊細に描かれています。また、
シャンプーのゆびさき 星の／まんなかでひかりになっ
ている／さがしてよ

逆光のかみのけゆるる たましい／は星になるときいち
ばんほんとう

という作品もあり、「透き通る」「ひかりの無さ」「星」「逆
光」など、いろんな角度からとらえられた「ひかり」が
心に留まりました。

吉沢美香さん（宮城県）の作品は

梅雨冷の／ずずずとクレラップ

墓石に映る目ん玉寒茜

缶詰めの肉寄っている雪催い

傘巻けば少し膨らむ冬野

風花に舌打ちを許されている

など身近なものと季語の取り合わせが大胆で想像力を刺
激されます。どこか思いもかけないところに世界の法則
というものが隠されているのではと不思議な感慨を持ち
ました。

源楓香さん（北海道）の作品は

私たち存在ごっこ／前髪で目を隠したりして

世界から／水平線を引き抜けば／スコールみたいに落下
する空

真夜中はステージ4の僕たちに／唯一残った延命装置

会話のない深夜高速午前2時／多分僕らはここで生まれた

春雨が世界を叩く／君だけが私に傷を残してくれたように、世界との緊迫した関係のなかで、自分の今いる場所を確かめながら、生きてゆく上で降りかかる困難への抵抗が表現されているように思えます。

豊富瑞歩さん（茨城県）の作品は

後輩に適当言っているときの／あたしの目が生きていてごめんね

数学がわからないから降りる駅／降りて歩けばきれいな夕日

卒業とともに校舎は閉ざされて／それでも光る廊下があつた

床置きのごみ袋が傾いてきて／こっち見る見る／見ないでほしい

恋っぽい気持ちひかなくて／眠れない夜に瞬くヘリコプター

など、感情のグラデーション、感覚の変容など微細な心の動きが掬い取られており、作者自身もつかみきれない思いを描こうとしているように感じられました。

浅葱さん（愛知県）の作品には

あなたを試すための余白

抹茶の甘さを知った日に／すんと理解した／母もいつか居なくなる

熱を出した私の／前髪を分けたのか／額を撫でたのか／わからない手つきは「母」

など、人との関係性が印象深く描かれていて、鋭敏な感受性が伺えます。その心を守るために

2番出口の階段を上る間の感情／だけ連ねた日記

下ろし立ての服／ほつれた肌着／バランスをとって、／今日も私は私

自衛のために消えていく執着／【大人】は薄っぺらくて強い／／生きる。

と、この世を生き抜くための方法を大切にしているのでしよう。